

「軍記評判」の源義経

『太平記秘伝理尽鈔』を中心に

山 本 淳

はじめに

源義経という稀代の英雄は、中世においては『平家物語』『義経記』を始め、御伽草子や謡曲、幸若舞曲など、近世に入っても浄瑠璃や歌舞伎、各種読本などに登場する。ある時は平家追討の名将として、またある時は様々な女性との恋愛を繰り広げる貴公子として、人々に親しまれてきた。その足跡は伝説となって全国各地に広がり、映画や小説、テレビドラマや漫画として現在においてなお、新たな展開をみせている。

私はこれまで、義経の武将としての側面からの考察を試みてきた^①。特に様々な兵法を取得してそれを行使する存在としての義経が、どのように描かれ、享受されてきたかを主に『異本義経記』^②という近世初期に成立した、もう一つの『義経記』ともいえる作品を通して検してきた。その過程で、『異本』が、近世初期に成立した「軍記評判」という軍記物に対する批評・論評の書と深い関係にあることを検証してみたことがある。特に、従来典拠未詳とされてきた『異本』中の二つの説話が『太平記評判理尽鈔』にみられること、『異本』における義経の人物形象が『理尽鈔』などに登場する義経に近いものであることを指摘した^④。こうした「義経兵法伝承と文学」という視点から、義経像の受容と変容を考えていくために、本稿では『太平記秘伝理尽鈔』^⑤を取り上げることにする。この、「軍記評判」の中でも最も享受されていた『理尽鈔』

において、義経がどのように描かれているのかをみていくことで、当時の義経に対する認識の一端を明らかにしたい。

一、源義経と楠木正成の関係

いうまでもなく、『理尽鈔』は『太平記』に対する評判書であり、その批評は南北朝期の人物に向けられる。特に、楠木正成の言動がほぼ全編にわたって登場するという「楠木中心主義」^⑥ともいえる性格も有している。この『理尽鈔』には、次のような由来が『太平記理尽抄由来』^⑦という資料に示されている。

一、楠正成兵伝八、太平記理尽抄ニテ伝フ。此理尽抄伝授ノ事ハ、法花法印日心ヨリ也。法花法印日心ハ、要法寺中也。太平記ヲ好ミ、古来ヨリ有来ル十巻抄ヲ以テ、読誦ス。然レ共、彼理尽抄有事ヲ知テ、未見ザレバ、是ヲ願フ事年久シ。其有所八名和、々々伯耆守長俊者、楠正成方軍法ノ弟子ニテ、正成討死前ニ、不成方軍法ノ弟子ニテ、正成討死前ニ、不残太平記ヲ以テ、其軍ノ其場其事ニ付テ、悉ク伝授ス。是ヲ理尽抄ト号シテ、名和家ニ伝フ。

『理尽鈔』が名和長俊の子孫正三から楠木正成・新田義貞兵法談義連院

陽翁(ここでは日応という名)に伝授されたことは、『理尽鈔』の奥書などにもみえるが、ここで注目されるのは、『理尽鈔』が「楠正成兵伝」とされ、「楠正成方軍法ノ弟子」であった長俊が「太平記ヲ以テ、其軍ノ其場其事ニ付テ」正成より伝授されたものであったとされる点である。兵法書としての伝授という認識が『理尽鈔』にあったことが確認できる。この認識は、他に『理尽鈔』から兵法に関する記事を抽出し編纂された『太平記理尽図経』の跋文にも、

所著新編五卷、軍法至頤、戰術秘訣、於太平記・理尽鈔鉅卷中ニ、体要ノ之枢鍵也。(略)矧且自本朝神代所レ伝軍權の々相續、綿々不絶。引レ伝ハリ源義経ニ、流レ速フ楠正成ニ。此ノ両雄蔵ニ之ヲ胸臆ニ而謀ルトキハ成、戰フキハ則勝。秘中秘、妙中(外)妙也。

とあることから伺える。またここでは、正成と義経が並称されている点に注意される。正成に象徴される兵法の流派が義経流の兵法の影響も受けていることは早く石岡久夫氏が指摘されていることから、「軍記評判」などの兵法書関係の世界の中の義経は、正成に連なるという認識があつたと理解されよう。

二、楠木正成・新田義貞兵法談義

では、『理尽鈔』において義経はどのように描かれているのであろうか。『理尽鈔』に義経の名が登場する箇所は全体で約二十を数える。内容から 正成・義貞と義経の兵法 義経・頼朝の兵法談義 『理尽鈔』編者の論評 その他 の四つに分類できるが、本章では前二者から

『異本』と関係する特徴的な箇所、正成・義貞と義経の兵法 についてみていくことにする。

実際の義経流兵法が正成流兵法に影響を与えたと認識されていたのは、前章の通りであるが、それは『理尽鈔』本文にもみられる。何らかの形で正成や義貞が義経の兵法に関係している箇所は計六箇所にのぼる。長くなるが、うち一例を以下に示す。

「正成・義貞兵法問答」

又或時新田義貞楠ニ対シテ宣フ様。「イカニ楠殿先日御物語有ツル大勢ニ難所ナシノ方便ハ。某モ別テ能謀ト存候。古ノ書典ニテヤ見玉ヒケン。又御身ハ才智謀勇。人ニ勝レテ在ハ。御一分ノ才ニテ侍力承度候」ト被レ申ケレハ。正成打笑テ。「古ノ書典ニテ見タル事モ不レ侍。生得愚ニ候ヘハ。左様ノ事ヲハ不レ存候。実ハ九郎義経ニ習テコソ候ヘ」ト申ス。義貞云。「正成ノ戯久シク聞モノナレズ候。何ノ時イカナル所ニテカ。義経ニハ対談候ソ」ト打笑テ宣タレハ。楠「サル事ノ候。正成朝参ノ間ニ『元暦ノ記』ヲ見候ニ。平家一ノ谷ニ籠リ。其勢凡十万余騎ト見ヘ候ヘトモ。(中略)敵ノ城後ノ嶺ニ登テ。敵ノ陣ヲ見ヲロシ。平家ヲ追落シタリト見ヘテ侍ル。誠ニ名將トコソ覚ヘ侍レ。某此事ヲ思フニ。先平家三草ノ嶺ニ陣ヲ取リナハ。義経寄タリ共。左マデキタナキ負ハヨモ侍ラジ。(中略)此ヲ以正成ケハシキ山ヲ便リテ軍ヲ發。国ヲ退治セハ。角コソト思ナリテ候ヘ」ト申セハ。義貞信服シテ、実モ賢ク候。古ノ書ヲ見ソニハ。皆加様ニ心ヲ付タキ事ニテコソ侍レ。往昔ノ義経ハソレマデノ才覚ハヨモ候ハジ」ト宣ヒケレハ。正成「イヤク殿ノ仰共不レ覚候。義経ハ未卅ニ不レ足男ニテソ侍ルラン。正成ハ早五十二及ビ候是一ツ。又正成ハ義経ガ方便ヲ手本トシテコソ。角ハ思ヒ成テ候ヘ。九

郎以前二。左様ノ似タル方便ヲモ仕タル者承及ヒ候ハス。何ノ事モ其本ヲ見テ八末々ハ巧能物ニテ侍レハ。タトヒ義経二後ノ正成力タクミタル才智程ナクトモ正成力及ヒタル二ハ有間敷候。其上一ヲ以テ万ヲ知ルト申ス事侍レハ。山ヨリ城ヲ落シタル義経。何ソ此才智ノ無クテ八候ヘキ」ト云ヘハ。義貞「最」ト宣シト也。「今ノ道蘊力文ヲ学シテ。我ニ越人ナシト思ヒナガラ。城ノ可レ落理ヲ不レ知ト。九郎ガ文ノ道ニハサマデハ学ザレトモ覚リシトハ。雲泥万里ノ異也」ト云シ

(巻七「吉野城軍事」、17ウ〜20オ)

本説話は、正成と義貞の兵法伝授に関する問答であるが、『太平記』(巻七「吉野城軍事」)には記載されていないものである。吉野合戦において大塔宮の身代わりとなり自害した村上彦四郎に関する論評に続いて記載されており、「大勢ニ難所ナシノ方便」と義貞の言葉にあるように、山間の難所を攻撃する方法について正成が解説・論評している。ここで正成は「実八九郎義経ニ習テコソ候へ」として、『元暦ノ記』なる書を読み、そこに描かれていた鴨越の戦いから「義経ガ方便ヲ手本ト」したと述べており、正成が義経を兵法の師としていたことが理解される。またこうした正成と義貞の問答は、『理尽鈔』¹⁴以外の一般の兵法書にもみられる。例えば『南木武経』¹⁵の著者掃雲軒の注記に、

和して曰、正成の曰ふ如く然り。源の義経、一の谷の合戦、八島の軍、長門の沖にて平家を海にたゞよはせ、味方陸にありて軍す。是良將の法なり。正成常に義経の軍を以て、師とすと曰り。新田義貞、正成に問玉ふ。正成の師、誰ぞ、正成義経なりと答えられたり。義経聖門に入らず、仁義の経を知らずといえども、軍は優れて上手の由、

「軍記評判」の源義経

正成即徒にも常は語れり。近世にも豊氏の秀吉、義経に似り。勝つ事を知て治むることをしらず。後代の主心得べし、武有て文なき将皆此の如し。
(巻四「船軍の事」)

とあることから、兵法書の一趣向として定着していたことが理解され、『理尽鈔』はこうした趣向に倣っているといえる。

いずれにせよ、楠木正成が兵法の師と仰いでいることから、『理尽鈔』における義経の性格設定は「兵法伝授」という側面がクローズアップされているといえ、それは『異本』に様々に語られる義経の兵法伝授説話¹⁶にも繋がるものといえよう。

おわりに

本稿では、「軍記評判」において源義経がいかに描かれていたのかを『太平記評判理尽鈔』を例にみてきた。こうした側面からの考察は、近年の「軍記評判」、特に『太平記評判理尽鈔』研究が「もう一つの『太平記』」として、『理尽鈔』を捉えたり、その影響を受けた作品への研究へ対象を広げている研究へ対象を広げている研究動向に沿つものである¹⁷。しかし、これらの研究はどうしても『太平記』の視点からのものが中心であり、義経や源頼朝、平清盛といった源平合戦の武将に対する分析はほとんど行われてこなかった¹⁸。しかし、「軍記評判」の受容者が自らの規範とした楠木正成を中心とした南北朝期の武将たちは、その「軍記評判」では故実・先例に従つて行動しているのである¹⁹。それは、古くは聖徳太子や依藤太秀郷、源頼義などであるが、やはり源平合戦の武将が大いに賞賛され、批評されているのである²⁰。なかでも天下の名将と称えられる義経は、様々な場面において登場する。また「軍記評判」は兵法書として

も享受されていた。なによりも、義経は変幻自在の兵法を操る「兵法の達人」であり、『六韜』や『虎の巻』といった兵法書伝授の系譜に名を連ね、兵法や剣法の流派の祖として崇められた存在であった。まさに、『理尽鈔』の義経も、楠木正成が手本とした「兵法の達人」であった。

こうした様々な「兵法伝授伝承」に登場する義経に当時の人々は何を求めたのか。それを解明するために本稿では、『理尽鈔』という作品を取り上げてみた。しかし、ここで取り上げたのはほんの一例にすぎず、『理尽鈔』において義経は様々な姿となって立ち現れており、残された課題は大きい。

今まで言及されることの少なかった兵法書や兵法伝授という、中世末期から近世初期という時間の流れの底に潜む、錯綜し重層的な伝承世界と文学の関係を新たに解き明かすことによって、日本人の義経観を明らかにすることが、今後の課題であると考えている。

注

- ① 拙稿『異本義経記』の構想 良将としての義経像「(福田晃氏監修・古希記念論集刊行委員会編『伝承文化の展望 日本民俗・古典・芸能』平十五、三弥井書店 所収)など。
- ② 『異本義経記』とは、近世初期に成立した『義経記』の外伝的な性格を持つ作品。以下、『異本』と略す。『異本』については、近年谷村知子氏によって精力的に研究が進められている。谷村氏『義経記』と軍記評判 『異本義経記』の方法「(関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓第二集』平十四、和泉書院 所収)、同氏『異本義経記』・『義経知緒記』諸本とその享受 『義経記』変容の一過程「(『中世文学』四八、平十五・六)。
- ③ 主な作品として、『太平記評判秘伝理尽鈔』(刊記不明)、『太平記評判

私要理尽無極抄』(刊記不明)、『平家物語評判秘伝抄』(慶安三 一六五〇 刊)、『甲陽軍鑑評判』(承応二 一六五三 刊)、『義経記評判』(元禄十六 一七〇三 刊)、『曾我物語評判』(正徳六 一七一一 刊)などがある。

④ 拙稿『異本義経記』と『太平記評判秘伝理尽鈔』(『軍記と語り物』三四、平十・三)など。

⑤ 加美宏氏『太平記享受史論考』(昭六十、桜楓社)、同氏『太平記の受容と変容』(平九、翰林書房)、『兵藤裕己氏』『太平記 よみ の可能性』(平七、講談社)、若尾政希氏『太平記読み』の時代』(平十一、平凡社)など。本稿での引用は、国立国会図書館蔵『太平記評判秘伝理尽鈔』(版本・四十五冊)、京都府総合資料館蔵『太平記評判秘伝理尽鈔』(版本・四十五冊)に拠る。以下、引用資料の傍線・句読点などを私に付すなど表記を一部改めた。なお近時待望の、今井正之助・加美宏・長坂成行各氏校注『太平記秘伝理尽鈔』(平十四、平凡社)、(平十五、平凡社)が公刊された。本稿での名称も同書に随い『太平記秘伝理尽鈔』とし、『理尽鈔』と略称する。

⑥ 加美氏⑤『太平記享受史論考』第三章第二節『太平記評判秘伝理尽鈔』をめぐって。

⑦ 引用は中村幸彦氏解題校注『太平記理尽鈔資料』(『日本庶民文化史料集成』8 寄席・見世物』昭五一、三一書房 所収)に拠る。

⑧ 明暦二(一六五六)年刊。引用は今井正之助氏『太平記評判書の転成』巻十二『河内国逆徒ノ事』を事例として、「(『愛知教育大学研究報告 人文科学編』四二、平五・二)に翻刻紹介されたものに拠る。

⑨ 石岡久夫氏『日本兵法史 上』第五章『古英雄景仰の兵法学』(昭四七、雄山閣)。

⑩ 四分類の内訳はそれぞれ六例・五例・四例・五例であるが、紙数の都合により紹介は略させて頂く。また、名前の列挙のみの登場箇所もあるが、煩雑となるため今回の考察からは除外する。

⑪ 延宝九(一六八一)年刊。引用は石岡氏注⑨に翻刻紹介されたものに拠る。

⑫ 義経自身の兵法取得説話に限っても、有名な鬼一法眼関係以外に鞍馬

で悪僧と打ち合いの練習をして、「大天狗二兵法ヲ習ヒアフト」噂されたりしている。

⑬ 注③。

⑭ たとえば『平家物語』の評判書については、堀竹忠晃氏『平家物語』の受容と変容 『平家物語評判秘伝抄』「伝」の部を中心として、「論究日本文学」六四、平八・五）、同氏『平家物語』の受容と変容 『平家物語評判瑕類』を中心に、「論究日本文学」六九、平十・十二）など、『曾我物語』の評判書については、村田明彦氏「馬場信意の通俗軍書 もつ一つの『曾我物語』をめぐる」（『近世文芸』六二、平七・六）拙稿、『曾我物語』の周辺 『曾我物語評判』の女性像」（村上美登志氏編『曾我物語の作品宇宙』平十五、至文堂 所収）など。

⑮ 第二章でみてきたような楠木正成自身が義経流兵法の系譜に連なるといふ認識は、『理尽鈔』に散見する。拙稿『異本義経記』の河越氏義経兵法の系譜（一）、「論究日本文学」六八、平十・五）参照。

⑯ 石岡氏注⑨。

⑰ しかし『理尽鈔』は、必ずしも義経を賞賛ばかりしてはいない。たとえば巻二十九「師直泰出家事付薬師寺遁世事」には、「此ノ故ニ将ノ一命ヲ軽クスルハ良将ニハ非スト。古ヘヨリ申シ伝テゲリ。源ノ義経ヲ良将トセザルモ。此ノ謂ト也」とあるように、「良将」としてではなく、「むしろ批判される対象として描かれている。おそらく「先例」や「規範」として紹介されているのであろう。『理尽鈔』における義経の全体像や『太平記』以外の登場人物については、稿を改めて考えてみたい。

（本学非常勤講師）